

Museum News



絵：柳田 基

2019 春学期

展覧会

企画展

アンデスの布
一糸があやなすチャンカイ・レースー
2019.4.15 (月) ▶ 6.15 (土)

※詳細は4ページをご覧ください

平常展

Gift for the Future
関西学院のあゆみ
一写真と絵でふりかえる時計台(仮題) -
2019.6.24 (月) ▶ 9.14 (土)

上ヶ原に関西学院が移転してから90年間、
キャンパスのシンボルとして中心に位置し続ける
時計台を写真と絵で振り返ります。

2019 秋学期

展覧会

企画展

関西学院 130年のあゆみ(仮題)
2019.9.28 (土) ▶ 12.14 (土)

寄贈された博物館資料をどのように活用するのか

展覧会を支える寄贈品

3回目のアンデス展

2019年春学期の企画展は『アンデスの布
一糸があやなすチャンカイ・レースー』と題し
て4月15日から6月15日まで開催されます
(詳しくは4ページをご覧ください)。当館にお
いてアンデスの染織品に関する企画展は、こ
れで3回目です。最初の展覧会は、博物館開設
準備室時代の2012年に『アンデスのデザ
イン』展、次いで開館2年目の2016年に『神々
の宿る布ー古代アンデスからのメッセージ
ー』を開催しました。

当館には、500点を超えるアンデスの染織
品が収蔵されています。これらはすべて寄贈
によるものです。最初の寄贈は、2011年
でした。芦屋にお住まいの古美術関係の仕事を
されているK氏から200点あまりのコレク
ションをいただきました。もとは京都の織屋
が蒐集したのですが、織屋が倒産し、縁あ
ってK氏が引き取られました。この寄贈を契機
に2012年の『アンデスのデザイン』展を開催
しました。

縁がとりなすコレクション

その企画展の準備に際して、かつてニュー
ヨークのメトロポリタン美術館に勤務されて
いた梶谷宣子先生に展覧会のご指導をいた
だき、これがご縁となって梶谷先生からもア
ンデスの染織品を寄贈いただきました。さら
に梶谷先生の紹介で、本学出身でウィルデ
ンスタイン東京(画廊)の水嶋龍一郎氏から300
点を超えるアンデスの染織品を寄贈いた
だきました。

そして、2018年にはK氏より新たに追加
の寄贈をいただきました。たいへん貴重な八
芒星神面文様の鳥毛の貫頭衣です。

このようにして当館のアンデス染織品コレ
クションは現在も増えつつあります。不思議
な縁です。しかし、縁がなければモノは集まり
ません。ご縁にみちびかれ、寄贈いただいた貴



八芒星神面文様鳥毛貫頭衣

重なる資料を活用して展覧会を企画し、公開し
ています。

展覧会を支える寄贈品

これはアンデス・コレクションに限ったこ
とではありません。当館の展示において寄贈
品はなくてはならない存在です。これまで当
館で開催してきた、愛新覚羅溥儀や大阪労演、
蔵書票に関する企画展は、すべて寄贈による
資料をもとにした展覧会です。昨年の秋の企
画展『美術と文芸ー関西学院が生んだ作家
たちーI』も、本学出身の洋画家大森啓助の作
品が寄贈されたのを契機に企画されました。

また、企画展だけではなく、本学の歴史を紹
介する平常展『関西学院のあゆみ』におい
ても、同窓の皆さまから寄贈いただいた学院関
係の資料によって展示が充実したものになり
ます。

このように寄贈品が大学博物館の展示を支
えているといっても過言ではありません。し
かし、寄贈品に頼るだけでは、博物館としての
自主的な活動に限界があります。今後、博物館
が収集方針を明確にして活動するためには、
自らが収集する力をつける必要があります。

(大学博物館長 河上繁樹)

展覧会報告 I

企画展

美術と文芸

—関西学院が生んだ作家たち— I

1910-20年代を中心に戦前の関西学院で青春時代を過ごした芸術家（画家、版画家、詩人、小説家、作曲家など）を紹介する展覧会を開催しました。

2018.10.29(月) ▶ 12.22(土)

9:30 ~ 16:30

※日曜日、11月23日は休館

開館日数 47日

入館者数 2,765人



感謝の気持ちを込めて

寄贈品の公開

当館では、2008年の大学博物館開設準備室開室以来多くの資料を寄贈いただけてきました。それらの資料は収蔵庫で大切に保管するとともに、少しずつではありますが調査や整理を行いながら企画展や平常展の特集陳列など様々なかたちで公開の機会を設けてきました。本展覧会も資料の受贈を契機として企画しました。

当館では、2016年度に本学出身の洋画家大森啓助(1898-1987)の作品(油彩画6点、スケッチ23点、その他絵葉書9点)を受贈しました。寄贈者の故上村善治氏(1914-2014)は家族ぐるみで大森と親交があり、作品を収集されていました。氏の没後、ご息女の杉村幸子氏が作品の行き先を探されるなか、大森の母校である学院の博物館の存在を知り、寄贈を決めてくださいました。ご家族の歴史や強い思い入れをもって集められた資料の終のすみかとして当館を選んでくださったことに感謝するとともに、作家の母校である当館が作品を所蔵することの意味や重要性を考え、どのようなテーマの展示がふさわしいのか頭を悩ませました。また学院には既に大森の油彩画5点が大森のご遺族大森房子氏から寄贈されていたこともあり、それら二つのコレクションを併せて展示することを決め、絵画作品だけでなく、文筆や翻訳など幅広い大森の活動を紹介する展示にしました。

「つながり」をテーマに

同時代の学院出身の作家たち

大森の創作活動を学院在籍時、卒業後、滞仏

中、帰国後(神戸、その後東京にアトリエを構える)というように分けると、その多くの時代で学院同窓の作家とのつながりを見いだすことができます。学院絵画部弦月会の仲間で卒業後も一時期一緒に展覧会活動を行った版画家の北村今三、同時期に学院に在籍し、フランス滞在中には大森が世話役を買って出た展覧会に出品するなど交流のあった野口彌太郎、フランス滞在時に面会した山田耕筰、大森の滞仏中に小磯良平とともにフランスに渡った竹中郁(パリの日本人会で顔をあわせていたことを物語る写真が残っている)など、写真や文献、新聞、雑誌記事を調べると作家同士のつながりが複雑に絡み合っていることがわかります。この作家同士のつながりは、大森の帰国後、神戸鯉川筋の画廊や神戸みなどの祭を舞台にしても見ることができます。さらにそこに登場する作家たちにも大森とは別の学院出身作家とのつながりを捉えることができ、十河巖や吉原治良、竹中郁など戦後も関西の文化を彩り、リードしていく面々の活動と作品を紹介しました。

学院の面白さを再発見

原田の森で育まれた文化

本展覧会では、1910年代から20年代に学院に在籍した作家を中心に紹介しました。当時の学院は神戸原田の森にあり、今東光や稲垣足穂が自伝的小説に書いているようにハイカラな雰囲気溢れる場所でした。当時も今も学院には美術制作の専門教育を行う学部はありませんが、美術好きの仲間が集まり、あるいは小説など文芸に関心をもつ者同士作品を書

いて同人誌を発行するなどして、創作活動に目覚めていきます。その頃の神戸には画家の溜まり場があり、学生も出入りして、交流することもありました。関東大震災の頃には学院近くに浅野孟府や岡本唐貴といった前衛美術家が住まい、学生たちは大きな刺激を受けたようです。作家としては名前を残しませんが、竹中郁の同級生である飯尾弘氏旧蔵のアルバムには、美術家たちと密な時間を過ごした彼らの学生時代が記録されています。

今回の展覧会を準備するにあたり、作品の寄贈者の方々だけでなく、関係資料をお持ちの博物館、たくさんのOB、OGの方々、そのご遺族の方々に資料を貸していただくなどお世話になりました。またこの展覧会を機に、竹中郁、坂本遼、直木友次良、青山順三、大江信らで組織された同好会月曜会メンバーの書簡が直木長太郎氏より当館に寄贈されました。今後整理を進め、何らかのかたちでご紹介する機会を設けたいと思っています。



ギャラリートークの様子

11月22日(木)、12月13日(木)に実施

展覧会報告 II

平常展

Gift for the Future 関西学院のあゆみ 大学昇格をめざして・上ヶ原移転物語

大学博物館では、博物館を訪れてくださる皆さんとともに学院が歩んできた道のりを振り返り、未来を築く礎としたいと考え、「Gift for the Future 関西学院のあゆみ」と題する平常展をシリーズで開催しています。

2019.1.15(火) ▶ 4.6(土)

9:30 ~ 16:30

※日曜日、2月1～7日、11日、3月21日は休館

開館日数 64日

上ヶ原校地建設予定地の標識 1928年



1929年3月、学院は創立の地である原田の森（現在の神戸市灘区王子公園）を去り、上ヶ原にやってきました。この移転の背景には、高等学部学生会を中核として活発化した大学昇格運動がありました。関西学院の歴史において特筆すべき事柄である大学昇格とキャンパス移転にまつわるエピソードを紹介しました。

高等教育への熱意

大学昇格運動のはじまり

1910年のカナダ・メソヂスト教会の学院への経営参画により、原田の森キャンパスに高等学部が開設されました。高等学部の最初の卒業生は1916年です。本展示の時期は、大学の卒業式の前後であるため、当時の卒業生の写真をもとにした撮影用の顔出しパネルを用意し、好評を得ました。



撮影用顔出しパネル

関西学院は1914年以来、委員会を設置して専門学校令による大学設置の検討を重ねてきました。1918年には大学設置を決議しましたが、成功しませんでした。それでも、大学昇格への機運は衰えることはありませんでした。同年12月の大学令制定を受け、高等学部学生たちは翌年1月に学生総会を開き、大学令による大学昇格推進

を決議することになりました。その際に、学生たちが大学昇格決議文を理事会に送ります。展示では、その際の決議文や嘆願書、理事会記録を紹介しました。

学院の悲願

上ヶ原移転と再開した大学昇格運動

大学昇格は学院の悲願でしたが、経済的理由により行き詰まりを見せていました。その解決のため、原田の森キャンパスを売却して郊外に移り、その差益で大学昇格の資金を捻出する案が出されました。激しい議論が続くなか、上ヶ原移転の決定がなされる理事会が1927年5月26日・27日に開催されました。

理事会では、26700坪の原田の森キャンパスの売却と70000坪の上ヶ原の土地購入が決定されました。移転当初の校地は当時の学生数1847人から考えると広大でしたが、将来の発展を見越してのことでした。移転前の上ヶ原の風景は絵画や写真資料からうかがえます。

2019年には、関西学院創立130年・上ヶ原移転90年を迎えます。発展し続ける上ヶ原キャンパスの変遷を、移転当時から現在までの校舎配置図でご覧いただきました。



上ヶ原キャンパス図 1929年



上ヶ原キャンパス図 2018年

1928年2月、阪神急行電鉄株式会社（現阪急電鉄株式会社）と学院とで上ヶ原移転の契約が交わされました。同月、上ヶ原キャンパスの起工式が挙行され、翌年に移転が完了しました。

上ヶ原移転により、大学昇格に向けた資金面の問題は解決しました。残る懸案は、連合教育委員会とアメリカ・カナダ両国の伝道局による昇格承認でした。臨時学生総会および学院理事会は、C. J. L. ベーツ第4代院長に対してアメリカとカナダに赴き、大学昇格案の通過を促進するよう要請しました。これらをうけて、ベーツ院長はカナダに発ち、上記各機関にて大学昇格が承認されました。

展示では、大学昇格承認を伝えるベーツ院長のカナダからの手紙や、学生会からベーツ院長に贈った大学昇格実現感謝状、大学昇格の喜びを伝える関西学院新聞を紹介しました。

体験型展示

移転当時の上ヶ原

本展示では上ヶ原移転当時の雰囲気を経験できるように、初期の図書館で使用された椅子を用意し、実際に座れる展示としました。当時へと思いを馳せるきっかけとなれば幸いです。



開催中の展覧会

アンデスの布

—糸があやなすチャンカイ・レース—

2019年4月15日(月)～6月15日(土)

※休館：日曜日、祝日(ただし5月6日(月)は開館)

南米アンデスは、染織の宝庫

南米大陸では、ペルーを中心とした太平洋海岸地帯からアンデス山脈の帯にかけて、古代より数々の文化が栄えました。ほとんど雨が降らず砂漠が広がる海岸部から、冠雪の峰々が連なる山岳地帯まで厳しい自然環境のもとで、高原ではリャマやアルパカが家畜として飼われ、山脈から太平洋へ流れ下る川沿いの肥沃な土地では農耕がおこなわれてワタが栽培されました。アルパカなどの獣毛や良質の木綿に恵まれ、糸を紡ぎ、染めたり、織ったりして地域や時代ごとに特有の染織品が作りだされました。

大学博物館には、500点を超える古代アンデスの染織品が収蔵され、古くは紀元前からアンデス文明最後のインカ帝国の時代まで、多様な染織品がコレクションされています。今回の展覧会では、そのうちのチャンカイ文化において作られたレースを特集します。その巧みな技とユニークな文様に焦点を当てた展覧会です。

チャンカイ文化が生んだ繊細な木綿のレース

チャンカイ文化は、10～14世紀ごろに中部海岸地域のチャンカイ川流域を中心に栄えた半農半漁の海岸文化です。灌漑が発達し、トウモロコシやイモなどの作物を生産するとともに綿花の栽培が盛んでした。海岸砂漠地帯の墓地から出土した織物には多くの木綿製品が見られます。

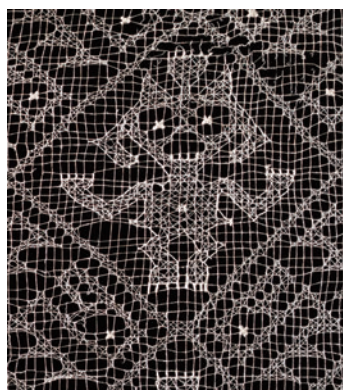
なかでも、今回の展覧会に出品されるチャンカイ・レースは、木綿糸を使って巧みに織りあげたもので、その細く紡がれた木綿糸からは紡績技術の高さがうかがえます。チャンカイ・レースは

一見すると糸が複雑にからみ合った編みもののような印象を受けますが、編みものではありません。腰帯機を使い、指先を操りながら織りあげ、あるいは刺繍をほどこしたものです。

文様はアンデスからのメッセージ

古代アンデス文明には文字がなく、文字をもたないアンデスの人びとは土器や染織品の文様にさまざまなメッセージを込めました。人間の意のままにならない自然は、畏敬の対象となり、それが文様になりました。半農半漁の海岸文化を営んだチャンカイの人びとのあいだでは、海に関する文様がよく見られます。それが織物という制約のなかでユニークに表現されています。なかには宇宙人のような文様も見られます。いったい何をあらわしているのだろうか、想像をたくましくして古代アンデスの文化に触れていただければ幸いです。

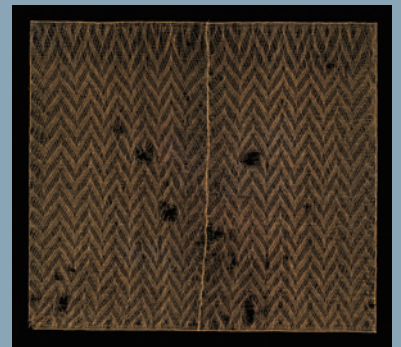
本展では、木綿糸があやなす技を見つめ、織物という制約のなかで表現されるユニークな文様を楽しみながら、その独自の染織文化の魅力に迫ります。



神像に鳥文様刺繍レース



石畳に波島階段文様刺繍レース



山形文様羅



格子文様平織



関西学院大学博物館通信 第7号

KGU MUSEUM NEWS No.7

2019.4.15

関西学院大学博物館

〒662-8501

西宮市上ケ原一番町 1-155

TEL 0798-54-6054 FAX 0798-54-6462

URL <http://museum.kwansei.ac.jp/>